

## H. Г. チェルヌィシェフスキーの「革命的民主主義」再考

大矢 温

はじめに

かつて В. И. レーニンが『人民の友』とは何か』において「民主主義と社会主義が一つの、不可分の分離不能の一体に合体した」時代の代表的思想家として Н. Г. チェルヌィシェフスキーの名を挙げ<sup>1</sup>、「ロシアにおける労働出版物の過去から」において「貴族時代のもっともすぐれた活動家」の「ゲルツェンにつづいてナロードニキの見解を発展させたチェルヌィシェフスキー」を「ゲルツェンにくらべて大きく一歩前進した」「はるかに首尾一貫した戦闘的民主主義者」として高く評価したこともあって<sup>2</sup>、ソヴィエト史学において、デカブリストの反乱からマルクス-レーニン主義に至る革命思想の発展史の中でチェルヌィシェフスキーはゆるぎない地位を占めていた。チェルヌィシェフスキーが文壇で活躍したのは 1853 年から逮捕される 62 年に至る短い期間であったが、この「チェルヌィシェフスキーの時代」はロシアが「革命的情勢」を経験した時代でもあった<sup>3</sup>、とされてきた。したがって「すべての革命的民主主義陣営の指導者と目された Н. Г. チェルヌィシェフスキー」の言論活動も、もっぱら革命への貢献という「ロシアにおける人民革命のイデオロギー、および指導者の中核の育成において決定的な役割を演じた」<sup>4</sup>という視角から分析されてきた。

たしかにソヴィエト社会主義という特殊な環境におけるこのような評価にはそれなりの歴史状況もあったし、また、真実の一面を捉えていることを否定するものではないが、それがすべてではないはずだ。革命への貢献以外にも彼の

<sup>1</sup> Ленин В. И. Что такое «друзья народа» и как они воюют против социал-демократов? // Полное собрание сочинений 5-е. М., 1963. Т. 1. С. 280.

<sup>2</sup> Ленин. Из прошлого рабочей печати в России. Там же. С. 93-94.

<sup>3</sup> Таубин, Р. А. Кружок Н. Г. Чернышевского и вопрос о создании революционной партии в годы первой революционной ситуации в России // Н. Г. Чернышевский: Статьи, исследования и материалы. Саратов, 1961. Т. 2. С. 35.

<sup>4</sup> Там же. С. 37.

思想を分析する枠組みはあるはずである。ところがソヴィエト崩壊から四半世紀が経過しようとする現在に至っても、日本においてチェルヌィシェフスキーの再検討はほとんど進んでいない。ソヴィエト崩壊というパラダイム変換を経ても、こと、チェルヌィシェフスキーに限ってみれば「歴史の見直し」は進んでいないのが現状である。

本論においては、1856年のクリミア戦争終結後から1861年の農奴解放令公布に至る、改革準備期のロシア社会におけるチェルヌィシェフスキーの言論活動を分析することによって、従来の研究を整理しつつ、これまでのチェルヌィシェフスキー像を再検討し、新たなチェルヌィシェフスキー像の可能性を模索したい。

#### I 「革命的情勢期」とチェルヌィシェフスキー

ソヴィエト史学においては、レーニンの「第二インターナショナルの破産」における規定に従って、1859年から61年をロシアにおける「第一次革命的情勢」と規定してきた<sup>5</sup>。この時期、客観的な革命の条件はそろっていたにもかかわらず、変革主体の主體的な条件が伴わなかったために実際の革命へと発展しなかった、という見方である。チェルヌィシェフスキーに関して、革命のイデオログという文脈からこの時期区分に結び付けて論じられてきた。ただし、彼が実際にジャーナリズムで活躍したのは1853年に『現代人』に書評を発表してから62年に逮捕されるまでの期間であり、その意味で「チェルヌィシェフスキーの時代」は「第一次革命的情勢」期より長い。獄中執筆した小説「何をなすべきか」が63年の3号から5号の『現代人』に発表された期間を含めれば<sup>6</sup>、さらに長くなる。ここではレーニンの規定に拘泥することなく、クリミア戦争後に改革への世論が盛り上がる中でのチェルヌィシェフスキーの言論活動を分析の対象にする。

<sup>5</sup> Ленин. Крах II интернационала. Т. 26. С. 218.

<sup>6</sup> 入稿前にネクラソフがこの小説の原稿を紛失したエピソードについては、パナーエワの回想を参照。Панаева А. Воспоминания 2-е издание. Л., 1928. С. 446-451.

さて、1856年にロシアにとっては屈辱的な条件で締結されたパリ講和会議によって終結したクリミア戦争は<sup>7</sup>、ロシアの後進性を白日の下にさらし、ロシア社会においては戦後改革の必要性が痛感された。政府の側も 1855年に即位した新帝アレクサンドル二世の下で農奴制改革をはじめとする一連の改革の道を模索することになる。改革に向けた幅広い意見や情報を得るため、ニコライ治世の厳格な検閲が緩和され、定期出版物が急増した<sup>8</sup>。また一方でロンドンからは国内の検閲を無視した『自由ロシア印刷所』発行の出版物が大量に密輸入された。『自由ロシア印刷所』を主宰した A. И. ゲルツェンは、検閲によって発言を封じられたロシアの声に広く発言の場を与えようとタミズダート活動を展開していたのだった。総じてこの時期、改革の機運に押されてロシア国内の言論界は大いに活気づいた。従来、サロンやサークルといった私的な空間で仲間内の少数者に向けて展開していた議論が、雑誌や新聞の紙上で広く社会に開かれた公開の場で論じられるようになったのである。

言論界が活気づき、多様な意見が噴出したこの時期、新聞や雑誌はそれぞれ自らの個性を打ち出し、固定した読者層を獲得しようとする。西欧派の急進主義を代弁すると目されていた雑誌『現代人』の書評欄を 1853年から担当し、さらに 1856年8月から『現代人』の編集者となったチェルヌィシエフスキーもまた、この雑誌の従来からの傾向を一層推し進めて、58年には「カヴェニャック」、「ランデ・ヴーにおけるロシア人」、および「ルイ 18 世およびシャルル 10 世治世下のフランスにおける諸党派の争い」などの一連の論文によって政治的には穏健な中道主義者、世代的には決断力に乏しく実務的能力を欠く「40 年代人」を「自由主義者」として批判し、また、盟友の H. A. ドブロリューボフも『現代人』に風刺専門の「雑誌の中の雑誌」『口笛』を 1858 年から付録として併設する一方、『現代人』において「昨年文学的些事」、「オブローモフ主義とは何か」を発表して『現代人』誌の方向性を急進的な方向に導いていた<sup>9</sup>。

<sup>7</sup> 大矢温「クリミア戦争とゴルチャコフ外交 ―敗戦処理と大改革―」、中央大学法学会『法学新報』、2000年9月、第107巻3・4号参照。

<sup>8</sup> 大矢「Ф. И. Чувпчевと検閲改革」、『スラヴ研究』、1994年41号、181頁[図1]参照。

<sup>9</sup> チェルヌィシエフスキーの自由主義批判については、石川郁男『ゲルツェンとチェルヌ

このような編集方針に危機感を抱いたのは、当時亡命先のロンドンから無検閲の出版活動を行っていたゲルツェンであった。当時ゲルツェンは自らが主宰する「自由ロシア印刷所」において、検閲のために国内で発表できない原稿を印刷してロシア国内に密輸出していた。その際彼は、第三者的な立場を保ち、内容の傾向を問わず、依頼された原稿は基本的にすべて印刷していた。原稿の内容についての責任は出版者ではなく、著者自身である、との立場からある<sup>10</sup>。さらに彼は、1857年から新聞『鐘』を創刊し、その紙面を読者による公開討論の場として解放した。そのような出版方針は農奴制改革など一連の改革を控えたロシア国内の世論に支持されて、新聞『鐘』はロシア国内で大きな影響力を持つようになったのであった。

さて、そのゲルツェンが 1859 年 6 号の新聞『鐘』に発表した記事「Very dangerous!!!」は『現代人』を強く批判したものだ。冒頭でゲルツェンは「最近、我が国のジャーナリズムにおいて、何らかの思想の紊乱、有害な風潮が吹き始めた」と述べ、自由な言葉を「口笛で野次りたて」る「教導的で教訓的な検閲の三頭政治の感化」に警鐘を鳴らした<sup>11</sup>。他方、ペテルブルクの『現代人』編集部は、明らかに自分たちに向けられた批判の調子の強さに驚き、および国内最左翼を自認する『現代人』および『口笛』をツァーリ政府の「検閲の三頭政治」と結びつけて批判するゲルツェンの意図を測りかねた。かくしてゲルツェンの真意を探るべくチェルヌィシエフスキーがロンドンのゲルツェンのもとを訪れたのは 1859 年 6 月のことだった。この会談の目的や内容、そして結果についてはソ連時代にも一連の論争が展開されたが<sup>12</sup>、会談の内容については現在に至るまで不明な点が多い。総じて会談は物別れに終わったようだが、従来、この会見は、民主主義の自由主義からの分離を象徴するエピソード、革

---

ィシエフスキー』、未来社、1988年、64-76頁参照。

<sup>10</sup> チェーリンらの要請によって出版した『ロシアからの声』の出版にあたって「我々は、我々が述べた意見でないものについて責任を負わない」と宣言している。Герцен А. И. От издателя // Голоса из России. Факсимильное издание. М, 1974. Кн. 1. С. 7.

<sup>11</sup> Герцен. Very dangerous!!! // Колокол. 1 июня 1859 г.

<sup>12</sup> 論争史については、Y. Imai, *The London Meeting of Herzen and Chernyshevskiy in June 1859*, 『工学院大学研究論叢』1970年、第8号を参照。

命的民主主義陣営内部での「自由主義的に動揺した」ゲルツェンと「はるかに一貫した革命的民主主義者」チェルヌィシエフスキーの路線を巡る論争、あるいは40年代人ゲルツェンと60年代人チェルヌィシエフスキーの世代間の論争として位置付けられてきた<sup>13</sup>。

「Very dangerous!!!」におけるゲルツェンのチェルヌィシエフスキー批判の中心が「検閲の三頭政治」であることは疑いもない。この「検閲の三頭政治」とは、当時政府内で検閲制度の改革が進む中で1859年1月に勅令によって設立された「出版問題に関する委員会」のことである。この委員会はA. B. アドレルベルク伯爵、文部大臣のH. A. ムハーノフ、そして憲兵隊参謀長兼第三部長官のA. E. チマーシェフの3名によって組織され、説得と奨励によって政府に有利な方向にジャーナリズムを導くことが目的であった<sup>14</sup>。ゲルツェンが広く紙面を読者に開いて紙上討論を主催していた一方、『現代人』誌が自由主義者を批判して党派的な傾向を強めていたことを合わせて考えると、ここでのゲルツェンの危機感は、結論を先に決めてしまっただけでそこへ読者を導こうとする『現代人』の編集方針の中に、世論を誘導するための「出版委員会」と同様の原理を見て、批判を展開したと考えるのが妥当である<sup>15</sup>。

その際考慮すべきは、この時期にゲルツェンは、より急進的な『現代人』とのみならず、より穏健な自由主義者とも同様の論争を展開していた点である。「ロシア自由主義者」を自称するB. H. チチャーリンとの間で展開された「告発状論争」である。発端となったのは1858年1月号の『鐘』に掲載された「編集者への手紙」であった。これは「斧を研げ、そう、事業のためだ。農奴所有権を廃止せよ。ツァーリの言葉によれば下から！」<sup>16</sup>と農民の武装蜂起を呼び

<sup>13</sup> 石川氏はこの論争を「上からの改革に対する両者の対応の相違」の反映と位置付けている。『ゲルツェンとチェルヌィシエフスキー』、76頁。

<sup>14</sup> この委員会については、大矢「ゲルツェンの自由出版活動と『Bureau de la press』計画」、『法学新報』、平成6年、第100巻第3/4号参照。

<sup>15</sup> 石川氏は「たんなる見解の思想的・政治的立場の相違」以外にも「政府による買収」をゲルツェンが非難した、としているが、根拠として挙げている「オガリョーフ事件」は状況証拠的で、国内最左翼と目される『現代人』が政府に買収されたこととゲルツェンが信じたとするには説得力に欠けるように思われる。石川前掲書、86頁。

<sup>16</sup> Письмо к редактору // Колокол. 1 октября 1858 г.

かける急進派からの手紙であった。上記のように自説以外にも紙面を提供するのがゲルツェンの出版方針だったので、彼はこの「手紙」をあえて『鐘』に発表したのだ。他方、「自由ロシア印刷所」に依頼して 1856 年から自分たちの文集『ロシアからの声』を発行していた自由主義者はこの急進的な記事に当惑し、ゲルツェンを説得するために 1858 年秋にチチャーリンがロンドンのゲルツェンを訪問する。この会見もまた、先に述べた半年後のチェルヌィシエフスキーとの会見同様、「どういう点でも意見の一致を見出すことなしに」<sup>17</sup>終わった。

会見後、チチャーリンはゲルツェンに宛てて、「情熱」に代わって「熟慮された自制」<sup>18</sup>を求めた手紙を送った。ゲルツェンは、この手紙を「告発状」と名付けて 1858 年 12 月の『鐘』に発表している<sup>19</sup>。

このようにゲルツェンは、「保守的自由主義者」と「熱烈な赤色民主主義者」<sup>20</sup>との間に立っていた。左右からの挟撃にあっているわけである。しかし他面で、チェルヌィシエフスキーとチチャーリンは左右正反対の立場にありながら党派性の立場からともに、一般的な議論にこだわるゲルツェンを批判したのだとも理解できる。「右か左か」ではなく、「広いか狭いか」の議論である<sup>21</sup>。当時文壇で絶大な影響力を誇っていたゲルツェンに対するこの時期のチェルヌィシエフスキーの思想的特徴を、党派的な編集へと『現代人』誌を導いた「狭い思想家」、あるいは明確な方向性を持った思想家と位置付けることも可能であろう。

---

<sup>17</sup> アレクサンドル・ゲルツェン著、金子幸彦 長縄光男訳『過去と思索 2』、筑摩書房、1999 年、168 頁。

<sup>18</sup> 会談後、ゲルツェンはチチャーリンにあてて、彼が「開かれた問い」たる「懐疑」を否定し「学問の示すプログラム通りに諸事件が合理的に発展すると確信」していると批判する内容の手紙を送っている。ゲルツェン、同書、169 頁。

<sup>19</sup> Чичерин Б. Н. Обвинительный акт // Колокол. 1 декабря 1858 г.

<sup>20</sup> Герцен Нас упрекают // Там же. 1 сентября 1858 г.

<sup>21</sup> この点については大矢「書評：長縄光男著『評伝ゲルツェン』」、日本ロシア思想史学会『ロシア思想史研究』、2012 年、第 3 号（通算第 7 号）、41-43 頁参照。

## II 「西欧派急進派」とチェルヌイシェフスキー

チェルヌイシェフスキーを 50 年代後半の「狭い思想家」と位置付けた上で、次に、彼がいかなる方向性を持っていたかを検証する。ここでは西欧派とスラヴ派、という対立軸の中で彼の思想を検討する。

すでに述べたように、クリミア戦争の後、国内のジャーナリズムが活発化する中で、定期刊行物はそれぞれ特色を打ち出すようになった。チェルヌイシェフスキーが編集する『現代人』は、M. H. カトコフが編集する『ロシア通報』とともに西欧派の雑誌と目されていた。対するスラヴ派は『ロシアの談話』および『世評』、そして農奴制改革に関しては『農村の整備』において自説を展開していた<sup>22</sup>。西欧派もスラヴ派もこれらの雑誌の誌上で学問芸術における民族性<sup>23</sup>、共同体の評価<sup>24</sup>、あるいは鉄道建設<sup>25</sup>などのテーマについてそれぞれ自説を展開したのであった<sup>26</sup>。

さて、西欧派とスラヴ派の問題に関しては、40 年代のモスクワにおける西欧派とスラヴ派の論争の中では西欧派最左翼と目されていたゲルツェンが、1848 年の六月事件を契機に西欧に幻滅し、その後スラヴ派の説くロシアの農村共同体に着目して「ロシア社会主義」を定式化したことが知られている。いわゆるゲルツェンの「祖国への精神的復帰」<sup>27</sup>である。それに対してチェルヌイシェフスキーは、55 年後半になっても農村共同体を「過去の残滓」<sup>28</sup>と否定的に評価している。この時点でもチェルヌイシェフスキーは西欧派の立場を堅持してい

<sup>22</sup> 大矢「古典的スラヴ派の言論活動」、『文化と言語』、2014 年 3 月、第 80 号、参照。

<sup>23</sup> 『ロシア通報』と『ロシア談話』との間で展開した「ナロードノスチ論争」に関しては、竹中浩「ロシア自由主義の形成過程(1)」、『国家学会雑誌』、1986 年 6 月、第 99 巻、第 1 章参照。

<sup>24</sup> 「農村共同体起源論争」については杉浦秀一『ロシア自由主義の政治思想』108-118 頁参照。

<sup>25</sup> 鉄道に関する論争については大矢「コシュリョーフと近代技術」、科研費研究プロジェクト「競争的国際関係と与件とした広域共生の政治思想に関する研究」報告論文集、2014 年、20-24 頁参照。

<sup>26</sup> 民族性、共同体、および鉄道など、論争の争点については『世評』にまとめられている。Обзор современных журналов // Молва. 1857. № 1. С. 4-7.

<sup>27</sup> 勝田吉太郎『近代ロシア政治思想史』、創文社、昭和 36 年、424 頁。

<sup>28</sup> Чернышевский Н. Г. Архив историко-юридических сведений // Полное собрание сочинений. М., 1949. Т. 2. С. 738.

るのだ。

さて、アレクサンドル二世治世下の検閲緩和によって、40年代には私的なサークルやサロンで展開していた西欧派とスラヴ派の論争は、雑誌の誌上にその舞台を移した。その際の主要な争点の一つがロシアの農村共同体を巡る論争であった。

論争のきっかけとなったのは、1856年の『ロシア通報』誌の2月号に掲載されたチチェーリンの論文「ロシアにおける農村共同体の歴史的発達の概観」である<sup>29</sup>。この論文においてチチェーリンは、ロシアの農村共同体が血縁的な家父長的共同体であり、スラヴ民族に特有なものであるとする A. F. ハクストハウゼンの説を批判し<sup>30</sup>、農村共同体はかつて西欧にも存在し、現存するロシアの農村共同体は徴税のために国家によって作られた、と論じた。歴史の発展を氏族段階から市民社会段階を経て国家段階に至る三段階の発展として見るチチェーリンは<sup>31</sup>、農村共同体の氏族的自然発生的な原理を否定して、国家の役割を強調する。彼にとって「農村共同体の意義は、純粹に財政的、端的に経営的なもの」<sup>32</sup>であり、共同体の目的は「農民身分を土地に緊縛し人頭税を支払うため」<sup>33</sup>だった。

農村共同体の中にロシア古来の生活習慣とロシア民族の特殊性を見るスラヴ派からすれば、このような見解を看過することはできなかつた。即座に И. Д. ベリャーエフ、つづいて Ю. Ф. サマーリンがチチェーリンを批判して論戦を挑んだ。いわゆる「農村共同体論争」である<sup>34</sup>。

---

<sup>29</sup> 共同体の起源を巡る論争については、竹中浩『近代ロシアへの転換』、東京大学出版、1999年、25-29頁参照。

<sup>30</sup> Чичерин. Обзор исторического развития сельской общины в России (I) // Русский вестник. М., 1856. Т. 1. Кн. 1. С. 375.

<sup>31</sup> チチェーリンの歴史図式については、杉浦秀一『ロシア自由主義の政治思想』、未来社、1999年、77-81頁参照。

<sup>32</sup> Чичерин. Обзор исторического развития... С. 391.

<sup>33</sup> Там же. Кн. 2. С. 590.

<sup>34</sup> Беляев И. Д. Обзор исторического развития сельской общины в России, соч. Б. Чичерина // Русская беседа. 1856. № 1. Критика. С. 101-146: Он же. Еще о сельской общине (на Ответ г. Чичерина, помещ. В «Русский вестник», No.12) // Там же. № 2. Критика. С. 114-141: Он же. Областные учреждения России в XVII веке. Сочин. Б. Чичерина //



さて、上述のように 1855 年後半になっても共同体について否定的な見解を持っていたチェルヌイシェフスキーだが、1856 年から 57 年に西欧派とスラヴ派が共同体を巡って論争を展開する中で、1857 年になるとスラヴ派に接近したことが知られている。1857 年の『現代人』の第 4 号の書評欄で「スラヴ主義と呼ばれる思考様式」をもった『ロシアの談話』が、「完全な是認ではないにしろ、承認さらには共感に値する」と歩み寄りの姿勢を見せたのである<sup>35</sup>。ただしチェルヌイシェフスキーは、ここでは農村共同体の起源に関わる論争には関心を示さない。彼は、私的所有が支配する西欧において、「無制限の競争が弱者を強者の犠牲にし、労働を資本の犠牲に」した結果、土地を持たないプロレタリアート階級、小土地所有者が没落した日雇い農民 *батраки* が発生したとし、「このようにして、イギリスやフランスにおいて何千もの金持ちが発生した一方、何百万もの貧民が発生した」<sup>36</sup>と否定的側面を指摘することによって西欧を礼賛する一部の西欧派から距離をとったのであった。

さらに続く 5 号の書評欄でも彼は、「現在のイギリスやフランスが非常に幸福な土地であり…それらの国の非常に悪いことを見当違いに賞賛する人々」と比較するなら、「もちろんスラヴ派をとらなければならない」<sup>37</sup>、「スラヴ主義にはスラヴ主義者たちを最も真剣な西欧主義者たちよりも高く位置づける、そんな一面がある」<sup>38</sup>として、西欧派の無批判な西欧礼賛を批判しつつ、スラヴ主義者に理解を示す。

ここでも彼は、第 4 号における西欧、なかんずく私的所有と自由競争に対する批判を引き続き展開する。「個々人の排他的権利の理想もそれ固有の欠点を持っている」<sup>39</sup>。他方共同体については、「西欧において共同体的土地所有の喪

---

Там же. № 3. Критика. С. 101-146: *Он же.* Областные учреждения России в XVII веке. Сочин. Б. Чичерина (Продолжение) // Там же. № 4. Критика. С. 101-146: *Самарин Ю.Ф.* Несколько слов по поводу исторических трудов г. Чичерина // Русская беседа. 1857. № 1. Критика. С.103-118.

<sup>35</sup> *Чернышевский.* «Русская беседа» и славянофильство // Полное собрание сочинений. Т. IV. С. 723.

<sup>36</sup> Там же. С. 729.

<sup>37</sup> Там же. С. 737.

<sup>38</sup> *Он же.* Славянофилы и вопрос об общине // Там же. С. 738.

<sup>39</sup> Там же. С. 739.

失がいかなる惨めな結果を招いたか、そして西欧民族にとってその喪失の回復がいかに苦しいものか、我々を見る」としてその意義を認めたのだ<sup>40</sup>。共同体的土地所有の「喪失」前には西欧にも農村共同体が存在した、という西欧派の歴史観は堅持し、「西欧の例」に普遍性を認めるという西欧派の基本姿勢は維持しつつも、共同体の有益性を認めるという点でスラヴ派に接近したのであった。ところが西欧において私的所有権の蔓延と自由経済の浸透によって農村共同体は破壊された。ロシアにおいても早晩、共同体は消滅するであろう。「（自由放任政策）は、西欧で今妨害しているように我々固有の生産の正しい傾向を妨害するのみならず、何世紀も我々に受け継がれてきた有益な制度を破壊するよう我々を駆り立てるだろう」<sup>41</sup>。このままではロシアにおいても西欧に於けると同様に、共同体が破壊され、弱肉強食の社会が到来するであろう。

すでに述べたように、チェルヌィシエフスキーは西欧の歴史において、私的所有権が発達した結果、弱肉強食社会へ至ったと分析した。その上で彼は、西欧の歴史は人類普遍の歴史なので、ロシアもその轍を踏むであろう、と危惧し、私的所有権以前の西欧にも存在した共同体的所有の中に、現在の私的所有権を相対化する視点を発見したのであった。したがって「スラヴ派への接近」の問題も、ロシア民族の特殊性とか、古来の伝統だからという理由で共同体を擁護したのではない。あくまでも「西欧=普遍」という西欧派の立場からの共同体擁護なのである。彼にとって農村共同体は、ロシア民族固有の習慣ではなく、かつては西欧にも存在した人類普遍の生活様式であった。西欧に於いては歴史の進歩とともに絶滅した共同体ではあるが、ロシアは西欧より遅れているが故に今なお共同体が存在している。つまりチェルヌィシエフスキーの「スラヴ派への接近」の問題も、あくまでも西欧派の立場からの共同体への注目なのである。

---

<sup>40</sup> Там же. С. 743.

<sup>41</sup> Там же. С. 746.

### III 共同体の社会主義論と国家の問題

前節において、チェルヌィシェフスキーが西欧の歴史発展を人類普遍の歴史発展とする西欧派の立場を堅持しつつも、弱肉強食の西欧社会に対する批判的な視座を持っていたことを確認した。西欧において悲惨な状況が進行する一方、ロシアにおいても差し迫った農奴制改革が「土地なし解放」という形で実施されれば、大量の日雇い農民、プロレタリアート階級が発生するはずだ。ここでチェルヌィシェフスキーは「何をなすべきか?」、いかにして弱肉強食化を阻止するか、という問題に話題を移す。

ここでも彼は、西欧の先例から論を起こしている。ヨーロッパにおいては、「農業においては共同体の利用 *общинное пользование*」、「工業においては工場的企業の共同体的財産 *общинное достояние* への移行」という「新しい志向」が生まれているのだ<sup>42</sup>。私的所有権以外の財産権が解決策となるのだ。ところが現実にはこの「新しい志向」は西欧において成功を収めていない。おそらくこの先長いこと、西欧においてこの「新しい志向」、は実現が困難であろう。他方、我が国においては、共同体の原理が「我らの農村生活の人々の強力な習慣の中にいまだ存在している」<sup>43</sup>。と、彼は私的所有以外の財産権の在り方をロシアの農村共同体の習慣の中に残る共同体的所有の中に見たのであった。

このように共同体の問題は、1857年の春から夏にかけてのチェルヌィシェフスキーの中心的な関心事となる。彼は57年7月にはロシアの農村共同体に関するハクストハウゼンの著作を正面から批評した論文「STUDIEN」を書き上げている。この中でも彼は、「経済的生産に資本が適用されるような経済発展の時期」、つまり資本主義の時代にロシアが足を踏み入れたことを認め、「生産者の生活に偉大な変化」が到来することを予告する<sup>44</sup>。そのうえで彼は、所有形態に関しては、「共同体的所有 *владение* を伴った国有 *собственность*」を「他のすべての所有形態 *собственность* よりも土地所有 *поземельная собственность* の理想に適合している」として私的所有に代わって共同体的所有の利を説くので

<sup>42</sup> Там же. С. 740.

<sup>43</sup> Там же. С. 743.

<sup>44</sup> *Он же*. STUDIEN // Там же. С. 304.

あった。それは「我が国に事実として保持されている」共同体的所有を擁護することによって、土地なし農民の発生を防ぎ、「すべての土地耕作者が土地所有者 землевладелец になる」ことができるからである<sup>45</sup>。

社会主義の理想を現存の共同体に結び付ける論理構造と引き、西欧派左派からのスラヴ主義への接近と引き、チェルヌイシェフスキーの共同体社会主義はゲルツェンのロシア社会主義と論理的にも、着想の経緯においても共通点が多い。しかし、ゲルツェンが社会主義を政治組織の問題として、J. プルードンの連合主義の影響を感じさせるアナキックな共同体の連合として構想したのに対して<sup>46</sup>、チェルヌイシェフスキーはこれを所有形態の問題として経済的に、あるいは法的権利の問題としてアプローチしている点に留意する必要がある<sup>47</sup>。

クリミア戦争後のチェルヌイシェフスキーの危機感は、西欧列強に対するロシアの軍事的敗北というよりは<sup>48</sup>、すでに述べたように、ロシアが「西欧全体的な経済活動に参加し」<sup>49</sup>「競争法則の完全な活動範囲に引き込まれる」<sup>50</sup>ことだった。そこでは「無制限な競争の宿命的な法則によって…富はますます少数者の手に集中し、一方、貧者の状況はますます苦しくなるに違いない」<sup>51</sup>。農村においても「農民の経営は資本家たちの競争によって完全に押しつぶされて」<sup>52</sup>しまうだろう。このような危機感のもとに、チェルヌイシェフスキーは私的所有権がもたらす悲惨な競争社会にロシアが転落することを防ぐ手段と

---

<sup>45</sup> Там же. С. 436.

<sup>46</sup> ゲルツェンは 1854 年 2 月の W. リントン宛の書簡の中で次のように書いている。「スラヴの諸民族は、国家の観念も中央集権の観念も嫌うのです。彼らは、あらゆる政府の干渉から守ってくれることが期待できる、分散した農村共同体の中で生きることを好みます。…おそらく**連合**がスラヴ人にとってもっとも民族的な la plus nationale 形態でしょう。」*Герцен. La Russie et le vieux monde // Собрание сочинений в 30-и томах. М., 1957. Т. XII. С. 152.*

<sup>47</sup> 「協同組合の原理は純粹に経済的で、全く政治的なものではない」*Чернышевский. Славянофилы и вопрос об общине // Собрание сочинений. Т. 4. С. 742.*

<sup>48</sup> 「クリミア戦争は…ロシアに非常に苦しい打撃を与えたわけではない」「それは小さく、表面的なものだった」。*Он же. Письмо без адреса // Там же. Т. 10. С. 95-96.*

<sup>49</sup> *Он же. STUDIEN // Там же. Т. 4. С. 303.*

<sup>50</sup> Там же. С. 304.

<sup>51</sup> *Он же. Славянофилы и вопрос об общине // Там же. С. 740.*

<sup>52</sup> *Он же. Кавеньяк // Там же. Т. 5. С. 153.*

してロシアの共同体に残る共同体的所有に着目したのだった。つまり彼は、私的所有権という所有権の形態に対抗するものとして共同体的所有という、これまた所有権の形態を提唱しているわけである。ロシアの農村共同体を、その組織面ではなく、そこに残る所有形態に着目して評価するチェルヌィシェフスキーにとって、共同体をもとにした「新しい志向」とは、既存の国家にとって代わる組織ではなく、国家の中で、さらに言えば国家によって担保される権利として構想されているわけである。チェルヌィシェフスキーの提唱する共同体的所有権が所有権という法的権利の一形態である以上、これは国家を前提とした議論なのである。

しかもこの「新しい志向」は所有権の一形態であるから、絶対君主制のロシアであろうと、貴族寡占制を目指す英国であろうと、民主主義のアメリカだろうと、「あらゆる国家形態と等しく併存することができる」<sup>53</sup>。民法典の改正だけで実現可能なのだ。「新しい志向」への移行は革命を伴う政体変更を必要としないことになる。

また、同じ書評の中でチェルヌィシェフスキーは、国家と所有権との関係について「国家制度というものは、それら（法的諸権利）の保証という目的を持った形態である」とも述べている。彼にとって、世界経済の侵略に対抗する手段が共同体的所有であり、共同体的所有という所有権を保証するのが国家、ということになる。彼において国家は、ロシアの民を資本主義的競争から守る、という意味で、積極的な意義を付与されるのである<sup>54</sup>。

この時期スラヴ派に接近した、といわれるチェルヌィシェフスキーだが、国民を守る制度としての国家、という概念はおそらくスラヴ派には希薄な思想だろうし、いわんやロシア社会主義の提唱者ゲルツェンには無縁な思想である。むしろ自由の前提として国家を構想する国家学派のチチェーリンに近い。

国家による国民の保護、という思想は、クリミア戦争敗戦によって「ナショ

<sup>53</sup> *Он же*. Славянофилы ... С. 741.

<sup>54</sup> См. *Он ОЯ*. Н. Г. Чернышевский о роли государства в будущем России // Н. Г. Чернышевский. Статьи, исследования, и материалы. Саратов, 2010. Вып. 17.

ナルな危機」に直面したロシアにとってアクチュアルな問題だった<sup>55</sup>。そしてこの問題は、チェルヌイシエフスキーのアジアへの注目と密接に関連している<sup>56</sup>。実際、彼が1856年8月にネクラーフから『現代人』の編集を任されて以後、『現代人』の誌面にはアジアに関する情報が多数掲載されるようになる<sup>57</sup>。これらは主にインドや中国など、西欧列強の侵略を受けた国々についての記事である。たとえば「中国革命の説明」は中国における太平天国の乱を解説したものである。

チェルヌイシエフスキーは「天の理に反した政府」が反乱によって崩壊寸前な様子を伝えながら、その原因を「イギリスとの不幸な戦争」に帰している<sup>58</sup>。アヘン戦争によって「平穏な暮らし *благоденствие*」を乱された中国人が「天命に背いた」として皇帝政府に反乱した、との理解である<sup>59</sup>。ここではヨーロッパの大国の侵略によって、国民に「平穏な暮らし」を保証できなくなった弱い国家が描かれている。クリミア戦争の敗戦を経験したロシアにとって、中国の事件は、他人事ではなかったはずである。

---

<sup>55</sup> チェルヌイシエフスキーの「ナショナルな」危機意識については、渡辺雅司「革命と民衆」、金子幸彦他編『チェルヌイシエフスキーの生涯と思想』社会思想社、1981年、所収、114-121頁参照。

<sup>56</sup> アジアへの注目については、同上、121-127頁参照。

<sup>57</sup> Напр., «Объяснение китайской революции», 1856, Т. 58(2): «Землеведение Азии»: «Китайская империя по описанию миссионера Гюка (1)», 1857, Т. 61(2): «Китайская империя по описанию миссионера Гюка (2-3)», «Любопытство возбужденное последними событиями в Азии», «Переселение более 100,000 вольных работников из Индии во французские и английские колонии», Т. 62(1): «Европейцы в Азии», «Описание англичане за будущность своих ост-индских владений», «Благотворность европейского влияния на Азию», «Печальное положение Китая», Т.62(2): «Китайская империя по описанию миссионера Гюка (4)», Т. 63(2): «О Турции и Персии», «Отчет о сношениях северо-американцев с Японией», Т. 64(1). И т.д.

<sup>58</sup> *Чернышевский*. Объяснение китайской революции // Современник. N. 8. 1856. С. 229.

<sup>59</sup> Там же.

## IV 国家権力と個人の自由

チェルヌイシェフスキーは、クリミア戦争後のロシア最大の危機を、ロシアの脆弱な資本や労働者農民が世界的な資本主義競争に巻き込まれ、プロレタリアートや日雇い農民に没落することと考えた。その上で彼は、資本主義競争の根本的な原理を私有財産制度に求め、そして資本主義競争に対抗する原理として、ロシアの農村共同体に残る共同体的所有の習慣に着目した。さらに彼は、共同体的所有の原理（あるいは工業においては組合の原理）という所有権の形態を担保する主体として国家を積極的に肯定し、国家の正統性を、中国人の口を借りて「人々の平穏な暮らし」の保障に求めた。ではチェルヌイシェフスキーにおいて、国家権力と個人の自由の間には緊張関係がないのだろうか。これは前衛党による革命、あるいはプロレタリアート独裁思想の先駆け、という視角からは見えてこなかった問題である。トクヴィルの『旧体制と大革命』を契機に展開した「地方制度論争」を手掛かりに分析してみたい。

1855年にC. モンタランベールの『英国の政治的未来』<sup>60</sup>が、そして翌56年6月にA. トクヴィルの『旧体制と大革命』<sup>61</sup>がフランスのパリで出版される。どちらも地方分権が発達した英国と中央集権が進んだフランスを比較し、大革命の原因をフランスにおける過度の中央集権に求めたものだった。行政制度の改革が模索されていた敗戦後のロシアにとっては十分アクチュアルなテーマである<sup>62</sup>。また一方で当時ロシアでは、1856年4月にスラヴ派の雑誌『ロシアの談話』が検閲を通過したのを機に、西欧派とスラヴ派との論争が雑誌の誌上で展開していた。そのような状況でまずこの両書に注目したのはスラヴ派だった。社会に対する国家権力の介入を警戒し、中央権力による近代化に対しては地方の伝統的な生活を擁護するスラヴ派にとって<sup>63</sup>、集権化を危険視するこれら両書は、自らの主張に根拠を与えるように思われたのだった。

<sup>60</sup> Charles de Montalembert, *De l'avenir politique de l'Angleterre*, Paris, 1855.

<sup>61</sup> Alexis de Tocqueville, *L'Ancien Régime et la Révolution*, Paris, 1856.

<sup>62</sup> См. Чернуха В. Г. Внутренняя политика царизма с середины 50-х до начала 80-х гг. XIX в. Л., 1978. С. 136-198.

<sup>63</sup> スラヴ主義における「人為と自然」の問題については、大矢「コシェリョーフと…」、24-26頁参照。

たとえば Ю. Ф. Самарин はトクヴィルとモンタランベールを「西欧のスラヴ派」と呼び、「彼らはすべて、基本的信条から言っても、その要求の結論から言っても、我が国の西欧派より我々に近い」なぜなら哲学、信仰や良心の領域における権力の介入、つまり「中央権力の専制」を問題にしているからだ、と読後感を残している<sup>64</sup>。

1857年第2号の『ロシアの談話』には両書に対する B. A. チェルカッスキー公の書評が発表された<sup>65</sup>。チェルカッスキーもまた、両者を高く評価する。彼らとともに「フランスにおける無制限の集権化の乱用とその惨めな結果」<sup>66</sup>を批判し、英国の地方分権の伝統を評価しているからである。さらにチェルカッスキーは、トクヴィルの前著『アメリカにおけるデモクラシー』を、それが『旧体制と大革命』と同じく行政的集権の弱体化を求めているとして、上記2書とあわせて高く評価する。「行政の集権化ができることは発展を妨げることで、発展を助けたり発展を作ったりすることはできない」<sup>67</sup>のである。またチェルカッスキーは、なによりもまず、このように「現行秩序に反する」著作が「自由に、無制限に出現した」事態に驚いたのだ<sup>68</sup>。総じてチェルカッスキーは、スラヴ派の立場から集権化に反対し、英国の地方分権の伝統を高く評価したのだった。言論の自由についても権力の介入を否定するスラヴ派の一般的な立場である。この立場から彼は、フランスの王権による中央集権化をまぬがれた三部会地方に地方自治の理想を見たのであった<sup>69</sup>。

チェルカッスキーの書評に呼応するようにチェルヌィシエフスキーは1857年第7号（第65巻1）の『現代人』に自らの書評を発表する。ここでチェルヌィシエフスキーは、「公衆の興味」という点から書評を書いた点、および言論の自由、および地方分権という点でチェルカッスキーを肯定し、彼の書評を「素

<sup>64</sup> Самарин Ю. Ф. По поводу книги “L’Ancien Régime et la Révolution” // Сочинение. М., 1877. Т. 1. С. 402.

<sup>65</sup> Черкасский В. А. О сочинениях Монталамбера и Токвиля // Русская беседа. М., 1857. №2. Критика. С. 23-88.

<sup>66</sup> Там же. С. 61.

<sup>67</sup> Там же. С. 62.

<sup>68</sup> Там же. С. 24.

<sup>69</sup> Там же. С. 80.



晴らしい記事」と評している<sup>70</sup>。チェルカッスキーが書評の対象としたモンタランベールとトクヴィルの著作については、モンタランベールの著作がフランスに貴族制を復活させようとする「全く誤った基本的傾向」を持つのにに対し、過度の中央集権を警戒するトクヴィルの著作は多少の概念の混乱はあるものの、「公正さを失っていない」<sup>71</sup>と評している。

これに対して西欧派の陣営からはチチャーリンがトクヴィルに対する書評「最新の評論家トクヴィル」を発表するのだが、その際に西欧派内部での不和が表面化する。『ロシア通報』への掲載を依頼された M. H. カトコフがチチャーリンの書評の掲載を拒否したのである。地方分権の伝統を保持する英国を礼賛するカトコフにとって、中央集権を賞賛する立場から書かれたチチャーリンの書評を自らの雑誌に発表するわけにはいかなかったのである。モンタランベールやトクヴィルの著作は、中央集権か地方分権か、という論点を提示したのみならず、ロシアの西欧派に対しては、今まで漠然と人類の普遍性を示していたと思われる「西欧」なるものの中に英国もあればフランスもある、という当たり前ではあるが、それまで看過されてきた事実を突きつけたのであった。

他方、『ロシア通報』への書評の掲載を拒否されたチチャーリンは、その原稿を『祖国雑記』の 8 月号で発表する<sup>72</sup>。ここでのチチャーリンによるトクヴィルに対する批判は、まずルイ・ナポレオンの第二帝政下で政治の専制化が進んでいる、というトクヴィルの危機感に向けられる。危機感に駆られ「中立でない立場」から分析しても「歴史の正しい認識は見発できない」<sup>73</sup>。歴史学には客観性が必要だ、との主張である。これは当時、西欧派とスラヴ派との間で学問や芸術における民族性、さらには客観性が争点になっていたので、その文脈から言えば西欧派の見解である。

次にチチャーリンが問題視したのは、中央集権に関するトクヴィルの否定的な態度である。歴史を国家段階へと至る三段階の発展段階として見るチチャー

<sup>70</sup> Чернышевский. Современные обозрения // Чернышевский. Т. 4. С. 789.

<sup>71</sup> Там же. С. 797.

<sup>72</sup> Чичерин. Новейшие публицисты // Отечественные записки. 1857. Т. 113. С. 501-582.

<sup>73</sup> Там же. С. 503.

リンは、貴族らの二次的権力を廃して国家統合を成し遂げたフランス王権に歴史発展の担い手を見る。フランス王権の中央集権化は歴史の発展法則の見地から積極的に肯定されるのである。これもまた、ロシア史の中でピョートル大帝を評価する西欧派の立場である。逆にフランス革命の原因は、18世紀に集権体制が弱体化したことに求められる。チチューリンにとって大革命は「強力な中央権力の不足」が原因で引き起こされたのであった<sup>74</sup>。

チチューリンの書評に呼応してチェルヌィシエフスキーは、直後の『現代人』第9号にこれについての評論を発表している<sup>75</sup>。この評論において、チェルヌィシエフスキーは、チチューリンによるトクヴィルの分権論批判を「多くの場合、チチューリンはトクヴィルを全く正当に攻撃している」<sup>76</sup>として、これを正当なものとして評価している。おそらくこの時点でチェルヌィシエフスキーはトクヴィルの説く分権論を絶対主義成立以前の封建制への逆行と解釈しているからであろう、王権による集権化を評価するチチューリンを擁護する。「もしチチューリン氏が封建論者より中央集権論者を上に置くなら、かれは全く正しいことになる」<sup>77</sup>と。さらに論を進めてチェルヌィシエフスキーは「中央集権論者より市民が100倍よいとしても、中央集権論者は封建主義者より1000倍よい」<sup>78</sup>とも述べている。何よりもまず国家的な統一が重要、という立場である。ここにクリミア戦争敗戦後のチェルヌィシエフスキーの「ナショナル」な危機意識の反映を見ることも可能であるが、彼のこの表現を、額面通りに受け取れるか、疑問が残る。これをロシアの現実に当てはめれば、国家統一を成し遂げたツァーリ権力の方が市民社会より重視される、という結論になるからである。あるいはこれは、国家統一の必要を認めながらも、チチューリンの極端な国家学派的な思考を皮肉ったのではないか、という解釈も可能であろう。この評論を「チチューリンに好意的な評論」と評価できるか<sup>79</sup>、より一層の検

<sup>74</sup> Чичерин. Новейшие... С. 575.

<sup>75</sup> Чернышевский. Современное обозрение // Чернышевский. Т. 4. С. 822-824.

<sup>76</sup> Там же. С. 822.

<sup>77</sup> Там же. С. 823.

<sup>78</sup> Там же.

<sup>79</sup> 竹中浩「ロシア自由主義者とトクヴィル」、『思想』、1985年7号、169頁。

討が必要であろう。

これと関連して、チェルヌィシェフスキーが「市民たちの祖国への愛」に言及している点にも留意する必要がある。チチャーリンの理解では王権が貴族と結んだ英国に対し、フランスの王権は第三身分と連合することによって貴族の特権を廃して集権化を果たした。この点にチェルヌィシェフスキーはチチャーリンの議論の中に、フランス王権がもつ、より進歩的な要素を見出したのかもしれない。また同時にチェルヌィシェフスキーは、フランスの領土の保全に貢献のあったジャンヌ・ダルクの例を引いて彼女が「集権化を賞賛する人々」<sup>80</sup>に属していなかったことを述べているが、これは国民が望んだ集権化（つまり政治的集権）と行政的集権化を分けるトクヴィルの議論に乗ったものである<sup>81</sup>。

すでに述べたように、チェルヌィシェフスキーは国家を否定していない<sup>82</sup>。むしろ国民に「平穏な暮らし」を提供するための装置として積極的な価値を付与していた。当時、論争のテーマになっていた共同体的所有権を担保するのも国家権力である。この評論においても、彼は国家の必要性についてチチャーリンの立場に理解を示したのだった。

このように、この評論においてはチチャーリンとチェルヌィシェフスキーの不一致は表面化していない。だが、1858年4月にチチャーリンが上記の『祖国雑記』の評論を含めた『英仏論集』を出版し、それに対してチェルヌィシェフスキーが1859年第5号の『現代人』で「評論家としてのチチャーリン」を発表することによって、両者の不一致は表面化する。

チチャーリンが『英仏論集』において展開するトクヴィル論は、基本的には『祖国雑記』の再録だが、『英仏論集』の序文において、チチャーリンは従来の上

<sup>80</sup> Чернышевский. Современное обозрение. С. 822-823.

<sup>81</sup> トクヴィルは、国法・外交など全国民的な問題を同じ人の手に任せることを「政治的集権」、自治体の問題など国の一部に関する問題を同じ人の手にまかせることを「行政的集権」と使い分けている。トクヴィル著、松本礼二訳『アメリカのデモクラシー』、岩波文庫、2005年、第1巻（上）、137頁。

<sup>82</sup> 1859年5月に発表した「経済活動と立法」では、より端的に「国家は…私人の福祉 благоのためにだけ存在する」と述べている。Чернышевский. Экономическая деятельность и законодательство. Т. 5. С. 597.

場を一層明確にしている。彼は現在のイギリスを悩ませている諸問題は、すべて中央政府が不十分なことが原因であるとして、集権化の必要性を主張し<sup>83</sup>、「自由の正しい発達、権力の強力な発達によってのみ保障される」<sup>84</sup>として国家権力による自由の保障、という国家学派の主張を展開するのであった。

チェルヌイシェフスキーにとって、チチャーリンが国家権力と個人の自由との間の緊張関係を欠いたまま、自説である三段階発展の枠組みに歴史をはめ込んで議論を展開しているように思えた。集権化を評価するあまり、ニコライ治世下のロシアにおける官僚制の弊害を無視しているようにも思えた。『現代人』第9号でチチャーリンの説く集権化に理解を示したチェルヌイシェフスキーであったが、「評論家としてのチチャーリン」では「われわれはチチャーリン氏に対して厳しくありたいと思う」<sup>85</sup>と態度を一変させている。これは国家の存在ではなく、その内容にチェルヌイシェフスキーの関心が移動したことの反映かもしれない。「抽象的真理は学者の論文においては適切かもしれないが、社会評論家の言葉はなによりもまずその時点における一定の社会の生きた要求に応じなければならない」<sup>86</sup>。チチャーリンの議論がロシアの現実を無視してスコラ的な議論に終始しているとの批判である。「学者」ではなく、「批評家」としての立場から議論せよ、という非難である。

続いてチェルヌイシェフスキーは、チチャーリンによる「デモクラシー、集権化、官僚主義」といった概念が混乱しているといって批判する<sup>87</sup>。すでに見てきたようにチチャーリンの理解では、フランス王権は貴族の特権を廃止することによって集権化を達成した。その際、特権を廃止して人々の境遇を均一化したことをチチャーリンは「デモクラシー」と呼んでいるので、彼においては「絶対主義とデモクラシーと相互に類似し」、フランス絶対王権による国家統一は「デモクラシー」をもたらしたと結論付けられる<sup>88</sup>。しかも中央集権化は

<sup>83</sup> *Чичерин. Очерки Англии и Франции. М., 1858. С. xiii.*

<sup>84</sup> Там же. С. xii.

<sup>85</sup> *Чернышевский. Чичерин как публицист // Чернышевский. Т. 5. С. 645.*

<sup>86</sup> Там же. С. 648.

<sup>87</sup> Там же. С. 651.

<sup>88</sup> *Чичерин. Очерки... С. 7.*

官僚制の発達を伴うので、「デモクラシー」と中央集権、および官僚制は並行して発達することになる。

他方、「デモクラシー」を「住民に対する行政官の完全な服従」、「自治、およびその連邦制へ展開」と、これを主権在民や政治参加の文脈で解釈するチェルヌィシェフスキーが<sup>89</sup>、このような解釈に対して、「その性格の本質から言って、デモクラシーは官僚制と正反対だ」<sup>90</sup>「中央集権と官僚制はまったくデモクラシー原理の属性ではない」<sup>91</sup>と反発するのも当然だった。その上でチェルヌィシェフスキーはチチャーリンに対して、抑圧者たる中央権力を支持するのか、被抑圧者たる民衆を支持するのか「エホバの神とパールの神」の二者択一を迫るのだった<sup>92</sup>。

ところでそもそも「境遇の平等」という意味で「デモクラシー」という用語を使いだしたのは、トクヴィルだった<sup>93</sup>。かれは「大いなるデモクラシー的革命がわれわれの間に進行して」<sup>94</sup>おり「遅かれ早かれわれわれフランスと人も、アメリカ人と同様に、境遇のほとんど完全な平等に達することは疑う余地がない」<sup>95</sup>という信念から「われわれの役に立つ教訓をアメリカに見出そう」<sup>96</sup>と『アメリカにおけるデモクラシー』を著したのだった。彼は第一巻においてアメリカの政治制度や政治風土について分析し、第二巻においてデモクラシーがアメリカ社会に及ぼした影響を分析した。他方、1861年にキエフでトクヴィルの『アメリカにおけるデモクラシー』のロシア語版が出版されると、チェルヌィシェフスキーはさっそくこれについての書評を発表する。

チェルヌィシェフスキーはトクヴィルの「基本的な傾向は正しい」<sup>97</sup>とおおむね肯定的に評価するが、同時に第一巻と第二巻との間の「公然かつ長々とした

<sup>89</sup> Чернышевский. Чичерин как ... Т. 5. С. 653.

<sup>90</sup> Там же. С. 652-653.

<sup>91</sup> Там же. С. 654.

<sup>92</sup> Там же. С. 669. 旧約聖書列王記下 10 章 26 に異教神パールの像を焼く記述がある。

<sup>93</sup> トクヴィル、『アメリカのデモクラシー』、第 1 巻（上）、9 頁。

<sup>94</sup> 同書、10 頁。

<sup>95</sup> 同書、26 頁。

<sup>96</sup> 同書、27 頁。

<sup>97</sup> Чернышевский. Непочтительность к авторитетам // Чернышевский. Т. 7. С. 686.

矛盾」<sup>98</sup>をも指摘する。その上で彼は「この著作の後半すべては、異常に退屈なものとも呼ぶべきお説教に満ちている」<sup>99</sup>と否定的な評価をする。実際トクヴィルは、第一巻においてアメリカにおける人民主権や地方自治といった政治制度、あるいは「自分たちの問題は自分たちで解決する」という自治の伝統について分析している一方、第二巻、とくにその第4部ではデモクラシーの社会において権力の集中が進む傾向について解説している。チチューリンに対する批判と同様、ここでチェルヌィシェフスキーは集権化を批判しているのだ。

全体について「基本的な傾向は正しい」とし、第二巻については「異常に退屈だ」と評価している以上、チェルヌィシェフスキーは、アメリカの民主的な政治制度や政治的伝統を分析した第一巻を評価していることになる。中央権力から自由を守る仕組みについても、封建的な「二次的権力」による分権ではなく、「アソシエーションに団結した普通の市民」が「非常に豊かで非常に影響力のある力強い単位」になって中央権力に対抗することを期待する<sup>100</sup>。

アメリカにおける民主的な政治組織とその運営の経験を教訓にすべし、というのがこの書評におけるチェルヌィシェフスキーの主張である<sup>101</sup>。彼は、「君主制フランスにおいては好奇心の対象にすぎなかったアメリカの制度は、共和制フランスにとっては研究の対象にならなければならない」というトクヴィルの言葉を引用しているが<sup>102</sup>、これは61年のロシア語訳がテキストとしたフランス語版の『アメリカのデモクラシー』第12版には書かれていない一節である。13版以降にしか記載されていないこの一節をあえて引用したところに、チェルヌィシェフスキーが新しい時代に入ったロシアの指針として、この著作の意義を高く評価していることを見ることができる。

---

<sup>98</sup> Там же. С. 702.

<sup>99</sup> Там же. С. 687.

<sup>100</sup> Там же. С. 567.

<sup>101</sup> См. *Он ОЯ*. Чернышевский о книге А. Токвиля «Демократия в Америке» // Научное обозрение: гуманитарные исследования. М.-Саратов. 2015. № 1.

<sup>102</sup> *Чернышевский*. Непочтительность... С. 686.

## むすび

チェルヌィシェフスキーはクリミア戦争敗戦後のロシアが直面する危機を、ロシアの弱い資本や労働者農民が弱肉強食の資本主義競争に巻き込まれ、零落することに見た。セポイの乱や太平天国の乱は、アジアの弱い国家が人々に平穏な生活を保障できない例としてみなされた。ここから資本主義の根本たる私的所有権に対抗する制度としての共同体的所有権が、そして共同体的所有権を担保する権力としての国家の正統性が導き出されたのであった。その上で、このような国家権力が専制化しないための制度的な保証としてアメリカのデモクラシーを参考にするよう訴えたのであった。

実は改革が現実化するこの時期、スラヴ派も農奴解放や共同体の議論から、内政面では地方自治の問題へ、外交面では汎スラヴ主義へと議論を展開している<sup>103</sup>。本来ならこれらの論点に関わる議論も分析した上でそれらをチェルヌィシェフスキーの思想の全体像の中で位置づける作業が必要であるが、紙幅の関係でできなかった。啓蒙思想、女性解放思想、そして協同組合思想などにも触れることができなかった。後日の課題としたい。

(平成 26 年度札幌大学研究助成制度による研究成果である。)

<sup>103</sup> 大矢「クリミア戦争直後のイヴァン・アクサーコフー スラヴ主義から汎スラヴ主義へ」、2008 年 11 月、札幌大学外国語学部紀要『文化と言語』69 号参照。